

第 38 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2008 年 11 月 1 日～3 日（和歌山大学）
セッション討議内容の記録

セッション名：バス(2)	
日付：11 月 1 日（土）曜日，セッション時間：15:00～16:30	
松本幸正（名城大）	
討 議 内 容	セッション全体： (107)の講演では，自治体として財政補助しているコミュバスを評価するため，路線ごとの利用者数，路線延長，迂回率などで路線特性を定量化する方法が示された。(108)の講演では，バス利用者の利便性を高めるため，バスの欠点を補う技術の開発も不可欠であることから，バス待ちゼロシステムの提案がなされた。(273)は急病のため急遽プログラム変更されたものであるが，鉄道グローバルオペレータの国際展開の現状とその理由についての考察がなされた。 セッション全体としては，公共交通のあるべき姿を目指して，各自治体はガバナビリティを高める必要があり，また，公共交通に対する理念と制度を確立させておく必要があるとの意見が出された。交通グローバルオペレータは，自治体と共有可能な理念を提案し，その理念の元での計画技術を自治体に買ってもらっているようであるが，この姿勢は，我が国の公共(バス)交通を展開していく上でも参考にできるとの意見が出された。
	(107) コミュニティバスのアセスメントに関する考察 森脇宏((株)地域計画建築研究所) ・バス利用者の意識は聞いているか → 今回は聞いていない ・コミュバスは許可条項(4条，79条など)によって運行条件が異なる。本研究では，コストに何を含めたか → 県補助路線を対象とし，全て同一基準で運行経費として含めて計算した ・迂回率の算出は直線距離で良いのか → 必ずしも良いとは限らないが，本研究事例の場合には妥当な指標となった
	(108) バス待ちゼロ社会の実現に向けたバス接近通知システムに関する研究 角田直樹(江東区) ・乗り継ぎでの情報提供は行えるのか → 今回は考えていない ・調査地点のバスロケ導入状況と本システムの利用意向との関連は → 調査対象地点の半数でバスロケは導入。バスロケ利用者の方が，本システムの利用意向が強い ・本システムの導入により，バス停周辺の喫茶店やコンビニで，バス待ち時間を有効に使える。利用者の意向に基づくのではなく，ニーズを創出すればよい
	(273)*ローカル公共交通のグローバル・オペレータとトラム車両産業のネットワーク 家田仁(東京大学大学院) *：急病により，プログラムが変更 ・地元企業よりグローバルオペレータの方がうまくいくのはなぜか → 比較はしていないが，地元ノウハウだけではうまくいかない。グローバルオペレータには，その上のノウハウがあるようだ → 海外の発注者は，グローバルオペレータの計画理念を買っているのだろう ・日本は人件費が高いので難しいが，日本のバス会社のノウハウは，海外でも通用できるはず ・計画技術にはスケールメリットがある。グローバル化によりリターンが大きくなるのであろう